春風秋霜 6月号

令和元年６月３日
島田市教育委員会だより
教育長　濱田和彦

春風をもって人に接し、秋霜をもって自らを慎む　　佐藤一斎

１　自転車乗り大会に参加して

５月 11 日（土）に自転車乗り大会がローズアリーナで行われました。川根小学校チームが最優秀賞を受賞し、県大会に出場することになりました。子供たちの競技の様子を見ていると、ハンドサインなど交通ルールについては知識や技能が高いものの、狭い場所をゆっくり走ったり、ピンを倒さずにスラローム走行をしたりすることは、日常の自転車運転の中ではほとんど必要としない技能なので、苦しむ子供が多かったと思います。

当日、島田自動車学校の社長から、最近の自動車学校の受講者のほとんどが、保護者同伴だという話を聞きました。私は、多くても 60％くらいかなと思っていたので、この実態には驚かされました。

私が自動車免許を取るころは、親の同伴ということは聞きませんでした。お金は親に出してもらったものの、全ての手続きは自分でしていました。最近は、大学受験に親の同伴が多いという話も聞くので、受験校から宿泊先まで自分で決めた私の受験時とは大きく変化していると思いました。

教育関係者としては、少し寂しい感じがします。変化の激しい社会には、様々な場で自己判断や自己決定が求められます。自立ということも社会で生き抜くためには大切な資質です。このような力を育てることの責任は、学校教育にもあると思います。強い心の育成を掲げる島田市教育委員会としても、この実態を踏まえ、必要な資質を意識した指導を求められると思います。

六合小学校の運動会

２　熱中症対策について

５月 25 日（土）に行われた市内小学校の運動会は、大変な暑さが予想されたものの、大きな事故もなく無事に終えることができました。子供席にテントを設置したり、計画的な給水タイムや塩飴を配布したりするなど、各学校は様々な対応を行っていました。

６月１日（土）に運動会を行う小学校もありますし、９月には湯日小学校や中学校の体育大会が行われます。また、これからも暑い中での体育の授業や部活動も行われるので、十分な熱中症対策が求められます。大切なことは、子供の表情をよく見ることだと思います。同じ暑さでも子供によって抵抗力が違います。同じ子供でもその日の体調によっても違います。子供の体調の変化をつかむために、表情をしっかり観察することが大切です。

３　学校訪問から

学校訪問時に授業を参観してうれしいことは、子供たちの表情が豊かなことと、授業に集中して取り組む様子が見られることです。５月 13 日（月）の初倉小学校の学校訪問では、このような子供の姿を見ることができたので、皆さんに紹介します。

初倉小学校では、全職員が聞くことを重視する中で、子供を主人公にした授業を行っています。例えば、教師が「子供の発表に反応しない」「子供の発言を復唱しない」などを実

践し、子供たちの思考を教師が誘導しないようにしているそうです。

私自身を振り返ってみると、素晴しい発言や、教師が期待する内容を発表した子供には、「素晴しい」などと反応していたし、子供の発言の意図が十分に伝わらなかったときには、子供の発言を復唱することもありました。

そこで、学校の意図を尋ねると、「教師が反応したり、復唱したりすると子供の思考を教師の考えに誘導してしまうから」という答えが返ってきました。確かに、素晴しい答えと教師が評価・反応してしまうより、子供に理解したかを尋ね、子供の言葉で説明させるほうが、子供の理解も深まるし、学習がクラス全体のものとなるでしょう。教師が評価したり、反応したりすることを否定しているわけではありません。子供によっては、教師の評価や反応が必要な子供もいるからです。しかし、これまで当たり前に実践をしてきたことであっても、振り返ってみる必要はあると思います。

４　県都市教育長協議会に参加して

５月 15 日（水）に行われた県教育長協議会において、急増する不登校対策について意見交換が行われました。その中で、富士市の提案には新しい発見があったのでお知らせします。富士市では、発達障害や LGBT の子供に対し、障害に応じコの字型の教室配置（向かい合った机の配置）を止めているそうです。

子供の中には常時顔を見合う関係にストレスを感じ、落ち着いた学習ができない子供がいるというのです。そのため、必要に応じ前向きに机を配置しているとのことです。島田市内にも音に敏感なためフードを被って授業を受けている子供がいますし、過去の勤務校にはダンボールハウスを活用して授業を受けた子供もいました。子供の落ち着く環境という視点は、学級経営を行う上で大切にしなければならないことだと思います。

肘かけ椅子

南條　隆彦　　社会教育課長

『なぜヒトの脳は大きくなったのか』

「ヒトは、直立二足歩行を始めたので手が自由になった。そして手で石器などを作ったので脳が大きくなった」というのは、違うらしい。直立してから 450 万年もの間、石器も作らず脳も大きくならなかったことがわかったからだ。体重の２％しかないのに全体の 30%ものエネルギーを喰う脳を維持するには高カロリーな肉を摂取する必要がある。石器を使い始めたから脳が大きくなったのでなく、石器を使って獲物をさばき効率よく肉を食べられたから脳が大きくなったのだ。では、なぜ肉食獣のライオンの脳は大きくならなかったのか。ライオンの狩りは効率が悪い。獲物がなかなか獲れない。ひもじいライオンは、仕事をしてないときはたいてい寝ている。無駄に動けないからだ。燃費の悪い大きな脳なぞ持っていては真っ先に死んでしまう。牙が大きく、脳の小さな個体が生き残る。一方ヒトは、ライオンが寝ている時間、夕暮れの洞穴のなかで、火を囲んでせっせと面倒なアシュール石器づくりに精を出す。高度な技術と忍耐力が要るが、どんな動物の皮も剥せて、骨髄まで取り出せるからインセンティブは高い。たくさんの群れで知識を共有しあうホモサピエンスなら、互いに知恵を出して、より性能のいい石器を開発しあったに違いない。つまり、余暇のあり方が、ヒトを世界の覇者にしたのだ。仕事を終え、飯を食って寝るだけのライオンとは生存戦略が違うのである。